Yukio Ninagawa

蜷川幸雄（にながわ　ゆきお）
1935年10月15日埼玉県川口市生まれ。69年『真情あふるる軽薄さ』で演出家デビュー。演劇界の第一人者として活躍し、ヨーロッパをはじめアメリカ、カナダなど海外においても高い評価を得、92年には英国エジンバラ大学より名誉博士号を、また、02年には英国政府より爵位を授与される。彩の国さいたま芸術劇場では、98年から「彩の国シェイクスピア・シリーズ」を手掛ける。03年に上演されたシリーズ第12弾「ペリクリーズ」が第3回朝日舞台芸術賞グランプリ、第11回読売演劇大賞優秀作品賞を受賞。06年1月（財）埼玉県芸術文化振興財団芸術監督に就任。著書「千のナイフ、千の目」（紀伊國屋書店）ほか

ブックショップがあったりして、そこに行くこと自体が市民にとっては知的時間を楽しむことになるんです。

「彩の国さいたま芸術劇場」もそんなふうになって日常的にも県民に身近なものとして親しまれるようになって欲しい。今はなんだか寂しいですよね、劇場の周辺も。

知事　ストリートの周辺が何もないので、歩くと遠く感じるんですね。例えば表参道などは原宿駅を降り、10分歩こうと15分歩こうと退屈しないと思います。この劇場もそのような部分を考えなければいけないなと思っています。

蜷川　この劇場で良い作品を常にやれるようになれば、活性化されて人通りも多くなり、お店も増えてくると思います。

知事　与野本町駅からここに来る間に楽しみな空間がいくつもできてくるようになると来やすくなりますね。駅の名前も「与野本町」から「彩の国さいたま芸術劇場前」とか、あるいは「芸術劇場前」などになれば一番良いと思います。

蜷川　本当ですよね。

知事　そうすると分かりやすくて、降りやすくなります。「与野本町」の下に、カッコ書きだけでも良いから書いてもらえるようJRにお願いしたいと思います。

蜷川　そのようになると良いですね。ところで、この界隈にある大学は埼玉大学ですか。

知事　一番近いのはそうです。

蜷川　僕はエジンバラのフェスティバルで僕自身が発見されたんです。その後、エジンバラの大学が僕に名誉博士号をくださいました。そこでは僕のことを自分たちが発見したという誇りがあり、僕がエジンバラに行くと「ニナガワが帰ってきた」と、僕の歓迎のために大学の図書館を開放して、学長を先頭に全員で晩餐をするんです。私は、「ああ、やっぱりイギリスの文化の深さはこういうところにあるんだな」と思いました。

またあるとき、公演を「野外でやりたい」と言ったら、大学の構内に仮設の舞台を作ってくれたり、あるいは、急な雨の中で僕がウロウロしていると「ニナガワ、ニナガワ、どこに行くんだ」と市民の方が声をかけてくれて、ちゃんと送ってくれるんです。そのようにして、単に劇場だけでなく、大学とか知的な階層の人たちも含めて、街の色々な人たちが応援してくれます。私は、「さすがフェスティバルをやる都市だ」と感動しましたが、この界隈も大学と一緒にそういう風にしたいです。

知事　そうですね。

何が優れているのかという事をジャッジしてくださる皆様が増えると良いと思っています。―― 蜷川

「ぶち壊して新しく再編成する」という、その手法にとても共感を覚えました。―― 上田

「彩の国だより」に「芸術のコーナー」を

蜷川　今日はぜひ、知事にお願いしたいことがあります。

県の広報誌「彩の国だより」に芸術劇場のページを1ページ作っていただけないでしょうか。今の「彩の国だより」ですと芸術劇場の公演がよく分からないんです。常に埼玉県の芸術は何がいつどこであって、内容はどんなものだという事がわかるように、どこかにまとめて、しかももう少し華やかに目立たせていただけないでしょうか。

知事　例えば、「芸術のコーナー」があっても良いのではないかということですね。

蜷川　これはお約束していただけるでしょうか。

知事　はい。改善します。たぶんホームページでも案内はしていると思いますが、そういうものも組み方が変わらなくてはいけないのかもしれませんね。

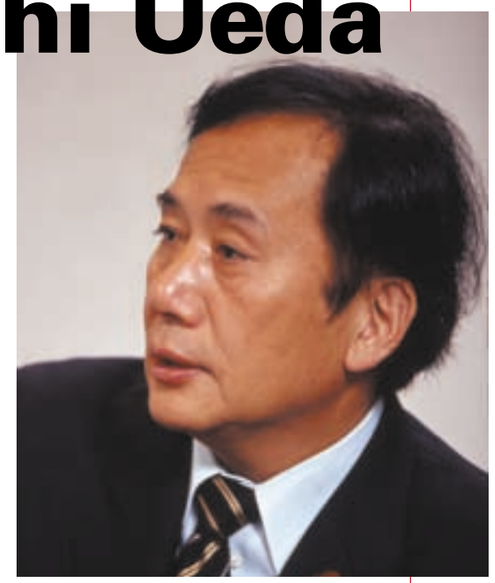
蜷川　埼玉県の文化政策がどのように行われているかを分かってもらうためにも、まとめてわかりやすく目立つようにお願いします。圧倒的にテレビの影響が大きい今の時代は、そうでもしないと文化情報は伝わりません。

広報誌や情報誌には喚起力が必要なのです。僕らの劇場を中心とした公演や講座やイベントについてはニュースのあり方、伝え方も変えようと思い、この財団の情報誌もこの号から一新しました。

「蜷川劇場」で良いものをいっぱい

蜷川　知事に県民代表として、これだけは我々に伝えておきたいという事がありましたら、おっしゃっていただきたいと思います。

Kiyoshi Ueda



上田清司（うえだ　きよし）
1948年5月15日　福岡県福岡市生まれ。75年3月早稲田大学大学院政治学研究科修了。76年新自由クラブ立党に参画。79年～86年　建設省建設大学校非常勤講師「地域社会論」「国土計画論」担当。80年より衆議院選に挑戦。4度落選するが、不屈の闘志で5度目（93年7月）に初当選後、96年、2000年と連続当選する。
03年9月埼玉県知事に就任。著書「法律はお役人のメシの種」（オーエス出版）

知事　本当に思い切ってやっていただきたいと思っています。蜷川さんの良いものをいっぱい出してもらわないと意味がなくて、そのうちに「蜷川劇場」と言われても良いような気がします。蜷川さんが芸術監督として指揮をとられるにあたり、注文を付けるようなことはありません。

私が思うのは、否定してつくりあげるのが芸術だとしたら、行政でも過去のものを否定して、新しいものをつくる。しかし、完全に過去のものを否定するわけではなくて、過去のものも生かしているわけで、それに何か一つ付加価値を付けていくということでは、まんざら芸術と違う話ではないと思っています。

ですから蜷川さんの本を読んだ時に、「ぶち壊して新しく再編成する」という、その手法にとても共感を覚えました。このあいだ観させていただいた「天保十二年のシェークスピア」などは掛け値なしに面白かったです。シェークスピアを分かりやすく、楽しく、表現していただき「なるほど、シェークスピアはこういうものだったのか。やはり優れた文学、優れた芸術は良いなあ。」と県民にも感じてもらえれば、私としてはそれだけでもすごいなと思います。

蜷川　今の言葉を全て励ましの言葉と受けとめて、精一杯やらせていただきます。

どうぞよろしくご支援をお願い致します。

知事　新境地を開いていただきたいと思って大変期待しておりますので、ぜひよろしくお願いいたします。

2005.12.05
彩の国 さいたま芸術劇場にて